



鳥画二多

世界が
憧れた
日本
↑↓

食器装飾の意匠にみる 日本趣味の嚆矢

国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学 稲賀繁美

フェリックス・ブラックモン夫妻は、印象派の展覧会に毎回のように出品した常連であった。フェリックスは版画家として、生涯に九百点を超える作品を残している。とりわけ、一八六六年から翌年にかけて制作した、セルヴィス・ルソーと呼ばれる軟質陶器の食器セットにより、ブラックモンは欧州の日本流行に先鞭を付けた。

セルヴィス・ルソーには北斎画派

の『花鳥画傳』の雉子や、広重の『魚尽し』の伊勢海老などからモチーフが取られている。円形の皿に、原色も鮮やかな花鳥や甲殻類が描かれた斬新な意匠。加えて、伝統的な同心円構図や縁取りを無視した自在な配置には、従来の西洋の絵皿装飾の規則からの逸脱が指摘されてきた。

それをもそのまま焼成した。こうして原画の絵柄が陶器の肌に移写される。そこに色付けし、再度焼成することで、作品が完成する。

もちろん絵柄は日本に由来するが、同心円を避けて自由に絵柄を配置する工夫は、ブラックモンの創意工夫と見られるべきだろう。同時代にフランス陶磁器の刷新を訴えたエルネスト・シエノーは、中国の装飾が左右相称を尊ぶのに対して、日本

の意匠は、非対称の美学を特質とする、と述べていた。そうしたシエノーの見解を汲んで、ブラックモンは新たな「日本的」構図を試みた、ともいえるだろう。

ブラックモンと文豪のエドモン・ド・ゴンクールとは、晩年になって、

どちらが欧州で最初に浮世絵の美学を発見したか、言い争った。陶磁器の包装紙に使われた浮世絵に最初に注目したのは自分だと主張するブラックモン。対するに『歌麿』(1891年)や『北斎』(1896年)を著述したゴンクールは、ライデンでシ

ェボルトの収集を見たのは自分たち兄弟のほうが先だ、と反論した。

十九世紀末には、日本趣味の先陣争いが、芸術家の先見の明を証拠立てる論争へと発展していったわけである。

日本の作品
葛飾戴斗(二代)

【江戸木版本集成2「花鳥画傳」】(芸艸堂刊)より



"Service Rousseau"
Félix Henri Bracquemond
(Musée des Arts décoratifs, Paris/パリ・装飾美術館所蔵)
西洋の作品